

対する課税)を受け入れざるをえなかった。全体的脈絡から切り離されて導入された新制度が、伝統文化の一部を破壊しつつ、同時に従来の制度を部分的に残し、あるいは強化させるという「選択的石化現象」が生じてしまったのである。これが本書全体の結論でもあろう。

取り扱いの困難さの窺われる手書き資料が縦横に駆使され、本来無味乾燥なものであるはずの公務文書が本書では雄弁である。鮮やかに加工処理された数的データは、植民地支配の具体的ディテールをも照らし出す。読み進むうち、読者は、教授の主宰される研究プログラムあるいは特殊講義に参加を許されたかのような思いを味わうことになる。

(B5判 四〇五頁 一九八七年三月
東京大学出版会 一八、〇〇〇円)
(本田設彦 京都大学大学院生)

神戸大学文学部
日本史研究室 編

『中川家文書』

本書は、神戸大学文学部日本史研究室に

所蔵される、もと豊後岡(竹田)藩主中川家伝来の文書二八三点(包紙や袋のみのものを除けば二四一点)を、高尾一彦・藤井譲治・横田冬彦の三氏を中心に、大学院学生らも協力して公刊されたものである。

中川氏は、摂津豊島郡中川村が本貫地といわれる摂津国人の一人で、織田信長の上洛後茨木城主となった瀬兵衛清秀が中興の祖とされる。山崎の戦では、清秀は羽柴(豊臣)秀吉の先陣をつとめて活躍、以後秀吉に属し、賤ヶ岳の戦では大岩山を守って討死した。後をついだ嫡子秀政は播磨三木城主となり、朝鮮出兵に従軍したが、陽智付近で鷹狩の最中に伏兵にあって殺された。もともと秀吉には「無人ニて番所見及罷出、待伏に逢手負候て、相果候」と報告された。それでも秀吉は覚悟なき曲言と怒ったが、父清秀の忠節に免じて、秀政の弟秀成に跡目が安堵された。秀成は文禄二年(一五九三)豊後岡六万六千石に移封、関ヶ原の戦には徳川家康に通じた。もともと秀成は時に豊後にいたため大きな戦功の機会はなかったが、所領の保持に成功し、子孫は岡砦七万石余を領して明治維新にいたった。中川氏は、こうして、畿内の国人か

ら、信長、秀吉の時代と関ヶ原、さらには大阪の陣をのりこえて近世大名に転進した、数少い大名の一人である。

本書収載の文書は、以上の清秀・秀政・秀成の三代、および秀成の子久盛、孫久清時代のものが大半をしめる。発給者からみれば、織田信長は、天正八年の朱印状が一通のみであるが、秀吉は七二点、うち四点は花押をすえた書状、朱印状は実に六八点(ただしうち三点は写)に達する。秀政の不慮の死のあと秀成に跡目を安堵した(天正二十年)極月六日付の朱印状もむろん含まれる。ついで豊臣秀次五点、豊臣秀頼五点、徳川家康一点、徳川秀忠五二点、と朱印状や黒印状があり、以上で全体の三分の二近くをしめる。いずれも本書によって始めて紹介される新史料である。

織豊期から江戸初期の新史料、しかも秀吉や将軍家の朱印状・黒印状等を中心にとだけまとまって新たに紹介されることだけでも驚異であるが、その内容も以上の中川氏の歴史とかさね合せて興味をそそられるものが多い。とりわけ六八八点もの秀吉の朱印状は、中川氏や豊臣政権の重要な新知見を多数含んでいるし、秀吉朱印状自体の

古文書学的研究にも、本文書は貴重である。関ヶ原の戦を前にしての前田玄以ら奉行人の書状、黒田孝高の書状、秀成と加藤清正がとりかわした誓紙なども、中川氏や九州大名の苦悩を如実に示している。寛永頃の豊後他領や隣国を探索した聞合帳も、各大名の微妙な点にふれている、等々、読み進むほどに興味のつきないものがある。

これら一群の文書は、江戸時代に度々整理され、三箱に収納されている由であるが、先述の跡目安堵や文禄二年の豊後で六万六千石を宛行った秀吉朱印状は原本がみられるものの、家康以後の黒印状には領知の根本文書がない。藩政の文書（現在竹田市立図書館に約千冊保管）とはちがって、江戸時代中・後期の中川家にとつての「古文書」が、すなわち本文書ではないかとも思われるが、そうした伝存のあり方についても、興味ぶかいものがある。

刊行にあたっては、原文の厳密な翻刻はもとより、人名等の傍注、重要事項の頭注のほか、藤井讓治氏のくわしい解説、さらに人名・地名の索引が付されている。そして何より有難いのは、可能なかぎり関係史料を博搜して年未詳文書の年紀を考証され、

その経過をも解説中に逐一明示されていることである。利用者にとって、この上ない親切な文書集であるといえよう。

本文書が神戸大学の所蔵に帰した事情については、「巷間に流れたものを、今井林太郎教授時代に取得したもの」(序)という以外に明示されていないが、これだけの文書群の散逸を防がれたことに、ふかく感謝しなければならぬ。神戸大学文学部日本史講座は、その今井教授と阿部真琴助教授(当時)によって創立された。両先生のあとをうけた高尾一彦教授も本年三月定年退官されたが、本書は「今井・阿部両先生の喜寿のお祝の行事と、高尾教授の退官祝賀行事とを兼ねてなされた」(序)記念出版である。この文書群の散逸をふせぎ、鋭意整理をすすめてこられた三先生の記念事業として、まことに意義ぶかいものがある。学界に貢献するところ大きい文書集として本書を公刊された関係各位のご労苦に対して、もふかく感謝するとともに、三先生のいっそうのご健勝とご活躍をお祈り申しあげる次第である。

(A5版 三五二頁 一九八七年三月
臨川書店 六八〇〇円)
(熱田 公 神戸大学教育学部教授)

編集後記

第七〇巻第六号をお届けいたします。本書の特徴は、論説・研究ノートあわせて四本の論稿のうち、三本が中国清朝史に属するものであるということです。それぞれ清代の経済史・社会史・政治史を取り扱った第一級の研究であり、清朝史研究の深化と広がりとをみることができます。また藤田論文は、わが国戦国期の領国経済圏論に流通という視点を取り入れた力作であります。なお、昭和六二年度の史林の刊行費の一部として、文部省学術国際局から昭和六二年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付を受けております。(耳)

一九八七年十月二五日印刷 定価一〇〇〇円
一九八七年十一月一日発行 送料五〇円
史 林 第七〇巻第六号(通巻第三四六号)

発行人 史 学 研 究 会

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

理事長 藤 縄 謙 三
振替京都七五一五五番

印刷所

中村印刷株式会社
京都市下京区七条御所ノ内中町五〇